

自律と秩序の二元論を越えて

NHKエンタープライズ

番組開発エグゼクティブ・プロデューサー

丸山俊一



撮影：森弘克彦

丸山俊一 (Shunichi Maruyama)
NHK エンタープライズ
番組開発エグゼクティブ・プロデューサー

慶應義塾大学経済学部卒業後、NHK 入局。
新機軸の教養番組、ドキュメンタリーを数多く開発。
著書に『14 歳からの資本主義』(大和書房)、
『結論は出さなくていい』(光文社新書)、
共著に『欲望の資本主義』(東洋経済新報社)、
『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』(NHK 出版新書) など。
早稲田大学、東京藝術大学などで非常勤講師も務める。

1.

「すべての人が、個人の自律性に基づいて生きるとしたら、いかにして経済や社会の秩序は保たれるのでしょうか。」

それにしても、実に難しいテーマを引き受けてしまったものだ。

そもそも「自律性」とは何か？ 曲者の言葉だと思う。

じりつ【自律】

① 他からの支配や助力を受けず、自分の行動を自分の立てた規律に従って正しく規制すること。「学問の―性」

② 『哲』 [ドイツ Autonomie] カント倫理学の中心概念。自己の欲望や他者の命令に依存せず、自らの意志で客観的な道徳法則を立ててこれに従うこと。

▽⇔ 他律 [同音語の「自立」は他の助けや支配なしに一人で物事を行うことであるが、それに対して「自律」は自分の立てた規律に従って自らの行いを規制することをいう]

(『三省堂大辞林 第三版』)

「哲学」の議論をしようというのではないのだし、ひとまず①の定義に沿って考え、「もし、明日からオフィスがなくなったら、個人・組織・社会はどうなるか？」という与えられた前提を踏まえて誠実に考えていこうとするならば、「オフィス」という存在からの支配や助力を受けずに、「仕事」を自分の立てた規律に従って正しく規制する人々がすべてとなった時に、経済や社会の秩序は保たれるのか？ということになる。

言葉遊びをしようと思っっているわけではないが、こうして導き出されてくる命題に、「オフィス」という物理的な存在が俎上にあがることに、あれこれと複雑な想いが去来する。オフィスの力学―。そもそも人は何ゆえに会社という場所を作り、そこに何を求めているのか？ということになる。日本特殊論、日本ガラパゴス論はひとまず置いて、歴史上の西欧の知の言葉に耳を傾けてみたい。

人はロビンソン・クルーソーのように一人で自己完結することなく、何ゆえに、社会的な分業を行おうとしたのか？ もちろん、アダム・スミスの「見えざる手」まで返る手もあるけれど、ここでは、それから1世紀以上遅れて

登場したフランスの社会学の祖の一人の言葉に耳を傾けてみよう。

2.

分業のもつとも注目すべき効果は、分割された諸機能の効率を高めることではなくて、これらの機能を連带的にすることである。分業の役割は、以上のすべてのばあいにおいて、ただ既存の社会を美化したり改良したりすることではない。諸機能の連帯がなければ存在しえない社会を可能ならしめることである。

（太字筆者『社会分業論』エミール・デュルケーム
田原音和訳）

1893年に記された社会のあり方についての考察。ドイツのマックス・ウェーバーと社会学の巨人として並び称される、フランスのデュルケームは、この「諸機能の連帯」について、もっと具体的に人間臭い記述がある。

われわれは、ただ勝手に自分たちと違った性質を他者のうちにみつけたからといって喜んだりほしくない。

浪費家は守銭奴と組もうとしないし、公明率直な人物は偽善者や陰険な者を仲間にはしない。親切でおだやかな心にとつて冷酷で底意地のわるい気質は好みにならない。だから、このように相互に惹きあう相違は、ある種のものに限られる。それは、あい対立し、排斥しあうのではなく、たがいに補いあう相違である。（中略）推理的で精緻な精神をもつた理論家は、直截な感覚とすばやい直観をもつた実務家にたいして臆病者は果敢な人物に、弱者は強者にたいして、さらにはその逆というように、たがいに特別の共感をいだくことがよくある。われわれはどんなに天分に恵まれていても、つねに何かが欠けているし、われわれのうちでもっともすぐれたものといえども、みずからに不足を感じているものだ。

（太字筆者『社会分業論』エミール・デュルケーム
田原音和訳）

そして「各自が自分の性格にあった役割をもち、ほんとうの用役の交換がおこなわれる」とし、これこそが「分業」だと説くのだ。さすが、120年以上前の牧歌的な考察だ

と思われるだろうか？　だが、この書物自体、既に2世紀の間に進んだ経済的な発展によって繰り広げられる、経済界の「弱肉強食」ぶり、「無政府状態」への危機感が繰り返し表明されており、「有機的連帯」をいかに取り戻すか？という問題意識に支えられているのだ。

デュルケームに倣って考察を繰り広げていくなら、3世紀にわたる問題に、今なお取り組んでいると言えなくもないことに、複雑な感慨を覚える。そして同時に、つぶさに読み込むことで、新たな意味を生み出すテクストとしての可能性をそこに見出すのであれば、人間の性、本質的な性向、資質についての考察の果て、「経済的な原理による分業」のベールの下には、常に人が人に惹かれる素直な、心性である「有機的な連帯による分業」があるはずだという視点だろう。

ゲノム解析で人間の持っている資質など丸裸だ、という科学的な視点もあるだろう。だがそれもまた分析のフレームのひとつであるに過ぎない。その科学的な視点をカギカッコに入れなければ、今現在、言葉の真の定義において多様な人々が、多様な仕事を選択し、多様な人生を歩み、多様な喜怒哀楽を感じている現実を忘れるわけにはいかな

いのだろうか。さらに言えば、その中に「多様な有機的連帯」への考え方もありうるはずだ。

3.

ではもう一人、社会における「分業」、その時生まれる人と人との関係性の本質についての考察を歴史の中に求めてみよう。

いよいよ原点に戻り、「経済学の父」の構想、アダム・スミスの登場だ。彼により語られてきた、一般的には「分業」と言われる、「労働の分割」。経済的な合理性に基づいて、自らの利己心、私利私欲に忠実なありようが、肯定されたと理解されているあの言説だ。解放された欲望のまま、人々が自らの利益を最大化することを目指し、市場で競争を繰り広げることで、国家全体で富は最大化され、しかも最適に分配されることになる、ひとまずはストリーパー化されてきた。そうした人々の振る舞いは、のちに「合理的経済人」と呼ばれるようになった。

だが、実はこれについては、面白い「異論」があるのだ。20世紀経済学の巨人の一人、フリードリヒ・ハイエクによるアダム・スミスの人間観の読み解きだ。「新自由主義の

理論的支柱」「市場経済最大の推進者」とされる存在の言葉を引きてみよう。

アダム・スミスとかれのグループの個人主義について現在広まっている誤解をもっともよく表している例はおそらく次のようなものであろう。それはスミスたちは「経済人」という妖怪を発明したのであり、そしてかれらの結論は厳密に合理的な行動というかれらの想定により、もしくは一般的に誤った合理主義の心理学によって、その価値を損なっているというのである。もちろんスミスたちはこの種のことは想定していなかった。かれらの見解では、人間は元来怠惰、無精、軽率で浪費家であり、人間をして目的と手段を合致させ、経済的にもしくは注意深く行動するようにさせるのは環境の力のみであると言う方が真実に近いであろう。しかしこのように述べることでさえ、かれらのもっていた人間性にたいする非常に複雑で現実的な見方に対しては不公正であろう。(中略)

ほとんど疑う余地がない主要な論点は、スミスの主たる関心は人間が最良の状態にある時にたまたま達成

しうることにあったのではなく、人間が最悪の状態の時に害をなす機会をできるだけ少なくすることであったということである。スミスやかれの同時代の人びとが擁護した個人主義の主要な長所は、その体制の下では悪人が最小の害しかなしえないということであると主張しても、おそらく言い過ぎではないであらう。それはその体制下を運用する善人を見つけるか否かによってその機能が左右されるような社会体制ではないし、またすべての人間が現在そうである以上に善人であってはじめて機能するような社会体制でもない。そうではなくて、それはすべての人びとをあるがままの多様で複雑な、時には善人であり、他の時には悪人であり、また時には聡明でありながら、もっとしばしば愚かであるという姿のまままで活用する社会体制なのである。スミスたちの目指したものは、同時代のフランスの人びとが望んだように「善人と賢人」のみに自由を限定するのではなく、すべての人びとに自由を認めることが可能であるような体制であった。

(太字筆者「真の個人主義と偽りの個人主義」フリードリヒ・ハイエク)

いかがだろうか？

「新自由主義の教祖」が本来描いていた市場の姿、さらにそこに蠢く人々の姿は、ハイエク自らが否定している通り「合理的経済人」などとは程遠く、さらにそもそもアダム・スミスもまた、そんな「妖怪」のことなど考えたこともなかったはずだ、と言うのだ。僕らはどこでどう、ねじ曲がった「思い込み」のまま、ここまで来てしまったのだろうか？ 市場の論理が「数字の物語」へと変換された時から、「数字の上昇」が自己目的化していくこと、「欲望が欲望を生む」のが資本主義の無限回路の性質、とは、筆者が企画制作した「欲望の資本主義 2017〜2019」のシリーズにおいて、様々な世界の知性の言葉を重ねる中から浮かびあがるテーゼだが、その根源にある、市場という場への想像力が問われることは間違いない。そして、もちろん、その市場での最適な効率性を求めて形作られたとされる会社なる組織の根源への想像力も。

4.

さて、こうして、デュルケーム、アダム・スミス、そし

てハイエクと、社会学、経済学の巨人たちの言葉を読む中で見えてくるのは、人間という存在の多様性、多面性……きれいな形容、言語化を拒むような複雑怪奇な性向、常にデジタルな解析の網の目からこぼれ落ちていくような性質である。そして同時にそこから見えてくるのは、今現在、僕らが「経済的合理性」などと名付けるようなものではなく、会社という組織体はできていないということだろう。

いささか陳腐な表現を並べるうちに本質に辿り着くことを願いつつ言葉を重ねるなら、それは、広い社会の中での居場所であり、広い意味でのアイデンティティへの欲求であり、人である限りどこかに求めるであろう共有の感覚、というところだろうか？ それを「共感」「つながり」などの言葉で表現することはあえて避けるべきと思われる、精神的な帰属性だと考える。

いまだ漠たる概念ではあるけれど、この程度のニュアンスの揺れを含んだ概念であれば、おそらくは、先にあげた3人の巨人たちも、みな同意してくれることだろう。

既にデュルケームが120年以上前に危機感を表明していた対象は、「産業社会」のありようのみならず、「産業社会」の生む影、イメージでもあった。機械化が進み、産

業化が進む中で、生産ラインの仕組みの「イメージ」が、人々に思考の様式まで植えつけていくことへの警告だった。それを乗り越えるために本来の「道徳的」な「有機的連帯」の重要性が説かれたわけだが、さて2019年を生きる僕らには、加速度的に変化を続ける社会状況がある。

今回の命題が生まれるベースとなったIT技術が作り上げた電子ネットワークというインフラ、そしてさらにAI、ゲノム解析も進む技術が社会の形を変えていく状況…、テクノロジーの発展のスピードの中、進む「イメージ」の拡散も視野に入れ続けねばならない。

「新実在論」を標榜する哲学界の旗手、マルクス・ガブリエルは、こうした思考を、「自然主義」として退けようとする。すなわち、科学的なものの方「のみ」が真理であるとする思考こそ危険であり、さらにその発想の延長上に、「自然主義」を通して生まれる人間観が社会に広がることを大いに危惧するのだ。

5.

「産業、技術…、こうした「機能」的な「イメージ」を生むものをこそ、警戒せよ。今、僕自身、このディスプレイ

の中に、ある形式において、キーボードを叩き続けることで、一つの論考を生もうとする過程でもある「生産」の「イメージ」の中にあることも自覚的でなければならぬということだろう。突然、ロラン・バルト、デリダらを想起するのも大げさだと笑われるのかもしれないが、ポスト・モダンの思想の良質な可能性もそこには浮かびあがる。こうした「ノイズ」が、実は人によっては時に想像を喚起することで、なんらかの「共有」も可能となるのかもしれない。そもそも、今僕はこの文章を、土曜の夕刻、多くの人がが勝手気ままに顔を突き合わせ、言葉を重ねたむろするカフェでしたためている。ディスプレイから顔をあげ、ふとぼんやり人々の顔を眺め、聞くとともに多くの会話の断片を耳にする時、「連帯」「たがいに補いあう相違」「もつとしばしば愚かであるという姿のままに活用する社会」などの言葉が頭の中に浮かんで消えていく…。このカフェから一歩外へと踏み出せば、街には、他にも多くのカフェ、喫茶店はもとより、レストラン、酒場、様々な人と人が顔を突き合わせる場が存在する。飲食という行為をとまなわずとも、書店という場所では、多くの人々が、現存の人々ばかりでなく故人の言葉まで求めてページをめくる光景に

遭遇する。ここまでくれば、その延長上に、たとえば友人のためにプレゼントを文具店で、スポーツ用具店で探す人々すら、「たがいに補いあう相違」を、「連帯」を求めて突き動かされる人々に見えてこないだろうか？

そして、ここまでモノの売り買いという商行為の中にまで「連帯」のシグナルを発見するに到った僕らの想像力は、会社というフィクションで行われている仕事というフィクションの現代的な意味を更新するまで、あと一歩ではないのだろうか？ ちなみに、ここで言う「フィクション」には、ある時代に人々が夢を見た「虚構」であり、同時に社会を機能させる「創造物」であるという、二重の意味をこめたいところだが。

6.

こうして、とめどなくエッセイ＝試みの論を走らせるうちに、冒頭にあげた「自律」の定義、実は②も視野に入ってくるのかもしれないと思いつく。曰く、「自己の欲望や他者の命令に依存せず、自らの意志で客観的な道徳法則を立ててこれに従うこと」だった。カントの思考に倣うのであれば、「自律」とは「道徳法則」なのだ。「『自立』は他

の助けや支配なしに一人で物事を行うことであるが、それに対して『自律』は自分の立てた規律に従って自らの行いを規制すること」だという注釈までついている。

いささか乱暴な総括を行わせてもええ、歴史上の知性たちの「自律」への格闘は、内部的な倫理性、人々の心の中にある振る舞いの基準の獲得ということになるのではないか？

「会社」という物理的な存在を解体し、「仕事」という定義が崩れていったとしても、人間という存在が、ここまでの思考の過程で深められた「連帯」の定義を持ち得るのであれば、カフェを「会社」とし、何気ない言葉のやりとりを「商談」として、ひとまず、社会は機能するだろう。ここで行われるのは、新たなルールに適合した「会社」「商談」のバージョンアップであると同時に、時代の夢が植えつけられる形式、まさにインセプションであるとも言えるだろう。

自由、市場、合理性…、様々な概念への誤謬が現在においても、とてつもなく大きな錯綜を生んでいるように、今一度、歴史的なスパンに支えられた「文明論的な読み替え」を図らねばならないのではなかったか？ それは、時に「近代」という時代より「中世」が身近に感じられてくるよう

な、時代を読む遠近法の倒錯にも似た経験となるかもしれない。

ちなみに、ハイエクはこうした様々な概念の誤謬を越えていくためにこんな言葉も残している。

人間のもついわゆる理性なるものは、合理主義的接近方法が想定していると見られるように、特定の一個人に与えられ、もしくは利用されるような、単一の形で存在するものではないのであって、理性は、ある人の貢献が他の人びとによって評価され、修正されるというような人間相互間の過程であると考えられなければならないのである。この議論は、すべての人間はその天与の資質や能力において等しいと想定するものではなく、いかなる人も他人のもっている能力、もしくは他人がそれを使用することを許されているはずの能力について、最終的な判断を下す資格をもっていないということ想定しているのである。

(太字筆者「真の個人主義と偽りの個人主義」フリードリヒ・ハイエク)

7.

さて「自律と秩序」をめぐる論考もひとまず終わりが見えてきた。そこで、ゴールとなる命題、「秩序」についても改めて考えてみよう。

秩序 ちつじょ order

2つ以上のものが、ある1つのものに対して有する関係をいう。この関係は宇宙の秩序のように、それを考える主体に依存しないで存在している場合と、数学における体系のように、主体の思考の働きによってのみ存在する場合があり、また静的なものと、動的なものがある。さらにここでいう「もの」は、事物、人間、概念、その他いかなるものでもありうる。したがって秩序という概念そのものも無限に多様で、自然的、社会的、倫理的、美的、法的、政治的などの秩序が考えられる。秩序を成立せしめる原因ないし根拠としては、理性的存在者が考えられ、秩序はその理性の具現として、種々の分野において人間が発見、実現すべき理念とされる。

(太字筆者『ブリタニカ国際大百科事典』)

自律、秩序…、そして理性。

もし「理性」が、先にハイエクが定義した通りであれば、この自律と秩序をめぐる考察そのものを開いていくこと、多くの人々と共有すること自体が、まさに新たな「経済」、「社会」そして「秩序」の更新を意味することになる。その時、我々は、まるで螺旋階段をぐるりと一まわり駆け上がるように同一の位相において、少し異なる眺望を手に入れる可能性に出会う。

会社というひとつの機能的な装置の壁が無くなった時に問われる「連帯」。「内省的想像力」が生む「連帯」は、産業社会の利益共同体のそれではなく、他者性を許容するものとなっていくと信じた。しかし、勿論「二元来怠惰、無精、軽率で浪費家」である人間が考えること。それが、頭でっかちな独りよがりな「理性」が活躍するものではないことも同時に願いつつ。

引用／参考文献

エミール・デュルケーム 田原音和訳 [2017] 『社会分業論』 ちくま学芸文庫

フリードリヒ・ハイエク 嘉治元郎・嘉治佐代訳 [2008] 「真の個人主義と偽りの個人主義」『個人主義と経済秩序 ハイエク全集 I-3』より 春秋社

丸山俊一＋NHK 「欲望の時代の哲学」制作班 [2018] 『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』NHK出版

丸山俊一＋NHK 「欲望の資本主義」制作班 [2017] 『欲望の資本主義』、同 [2018] 『欲望の資本主義 2』東洋経済新報社